

〔原著〕

## 母親の養育態度が小学生の 社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響

筑波大学人間総合科学研究科：八越 忍  
筑波大学心理学系：新井邦二郎

Effects of mother's child-rearing attitude on social skills,  
empathy, and classroom adjustment in elementary school students

Shinobu Yakoshi and Kunijiro Arai

### 問題と目的

現在、不登校をはじめとした児童の学級不適応が教育現場で問題となっている。文部科学省(2005)によると、平成16年度間の小学生の長期欠席者は59,000人ほどおり、そのうち不登校児童数は23,318人となっている。不登校児童数は平成15年度に続き、3年連続で減少したとされるが、在籍児童数に占める割合は0.32%と309人に1人であり、深刻な問題といえるだろう。したがって、児童の学級適応を促す予防的援助の必要性が高まっていると考えられる。

Sullivan (1953) による対人関係の発達的変化の理論によれば、児童期には仲間から受け入れられることがその中心的課題となっている。そして、小学校の中学年から高学年にかけては、仲間からの受容の欲求の最も高まる時期とされる(井上, 1992)。友人関係は児童の学級生活の重要な一側面であり、友人関係上の適応は、児童の学級適応を考えていくうえで着目すべき観点であるといえる。

佐藤・佐藤・高山(1988)は、攻撃的な子どもと引込み思案な子どもから構成される拒否児は、仲間との相互交渉に必要な社会的スキルに欠けており、そのために仲間からの受容が悪いことを示唆している。児童の対人関係の改善をめざし社会的スキル訓練が実施されている(藤枝・相川, 2001; 石川・小林, 1998) こと

からも、児童期における仲間からの受容には適切な社会的スキルが必要であると考えられる。

社会的スキルは学習を通して獲得される行動である(菊池, 1998; 鈴木・庄司, 1990)。児童は親の行動のモデリングや自分自身の行動に対する親からのフィードバックを通して社会的スキルを学習する(Gresham, 1986)ため、家庭は児童の社会的スキルの学習には重要な場面であるといえる。

母親の養育態度と児童の社会的スキルの発達について、井上(1995)は、受容型の母親を持つ児童の社会的スキル得点の方が、拒否型の母親を持つ児童の社会的スキル得点よりも高いことを明らかにした。谷口・田中(2004)は、母親を温かく、支配的でないと認知している児童ほど、社会的スキル行動の頻度が高いことを指摘している。これらの結果から、ある程度仲間との相互作用によってスキルを身につけていくとされる児童期においても、母親の受容的な態度が児童の社会的スキルの発達には重要であることが示された。

さらに、児童期において友人関係を形成し、円滑に維持していくための要因として共感性も挙げられる。共感性には個人の他者理解を深めるとともに、個人間の結びつきを強めたり、対人関係や社会生活を円滑にしたりする役割があるからである(春木・岩下, 1975)。実際、共感に基づいた思いやり行動をよく示す子どもは人

気があり、仲間からも高い頻度で思いやり行動を受けることが観察されている（首藤，1994）。

桜井（1986）は、小学5、6年生を対象に共感と向社会的行動との間に有意な正の相関を見出している。また、渡辺・衛藤（1990）は、小学生において共感性が向社会的行動に及ぼす影響について検討し、共感性が高い児童のほうが、低い児童より援助行動が多いことを明らかにしている。このように、共感性は向社会的行動を動機づける重要な要因であり、両者が強く関連していることが明らかになっている。

児童の共感性と親子関係を扱った研究は見られないが、児童の向社会的行動の発達と親子関係に関しては、優しくて温かい母親の態度が児童の向社会的行動を育てるということを多くの研究が示唆してきた（森下，1988）。共感性と向社会的行動とが強く関連しているならば、向社会的行動の発達を促す母親の養育態度が、共感性の発達に関しても影響を与えていると推測される。すなわち、共感性の発達にも優しくて温かい受容的な母親の態度が関連していると考えられる。

ところで、これまでの親子関係研究において、親が子どもに対してしつけをしたり行動を統制したりする「統制（支配または干渉）の因子」、および親子の情緒的関係に関する「情緒的支持（愛情または受容）の因子」の2因子については、ほとんどの研究において共通して見出されている（谷井・上地，1994）。三隅・阿久根（1971）は、児童の評定によるPM式親子関係尺度を用いて、小学4、5年生の適応性との関係を検討し、P機能の高低では差がなく、M機能の高い親の児童の適応性が高いことを示した。ここでのP機能は「統制の因子」に、M機能は「情緒的支持の因子」に類似している。先に述べた、井上（1995）の研究においても、母親の情緒的支持と児童の社会的スキルとの間に相関が認められたのに対し、母親の統制と児童の社会的スキルの間にはかなり低い相関しか見られなかった。よって、児童の社会的スキルと共感性の発達に影響を与える母親の養育態度としては、「統制の因子」および「情緒的支持の

因子」の2因子のうち「情緒的支持の因子」のみに限定できるだろう。

以上から、友人関係上の適応によって大きく規定される児童の学級適応には社会的スキルと共感性が重要であること、そして、その社会的スキル、共感性は母親の情緒的支持と関連があることがわかる。すなわち、母親の情緒的支持が児童の社会的スキルや共感性を通して児童の学級適応に影響を与えると考えられる。そこで本研究では、「母親の情緒的支持が児童の社会的スキル、共感性を高め、さらに、その社会的スキルや共感性が児童の学級適応にポジティブな影響を与えるだろう」という仮説を検証することを目的とする。母親の養育態度として情緒的支持を取り上げ、児童のスキルの側面、情緒的側面を介して学級適応にどのような影響を与えるかについて検討する。

## 方 法

**調査対象者：**新潟県内の公立小学校4校の5、6年生218名（5年生男子63名、女子55名、6年生男子44名、女子56名）であった。このうち、回答に不備のない173名（5年生男子50名、女子43名、6年生男子32名、女子48名）の回答を対象に分析を行った。

**調査時期：**2005年9月中旬から9月下旬に実施した。

**調査内容：**

(1) 親子関係診断尺度：「情緒的支持」10項目  
辻岡・山本（1976）が作成した、情緒的支持（10項目）、同一化（10項目）、統制（10項目）、自律性（10項目）からなる親子関係診断尺度（EICA）のうち、情緒的支持（10項目）を用いた。この尺度は、児童が自己に対する親の態度をどう認知しているかを測定するものである。本来、中・高校生用であるが、その内容上小学校高学年にも適用可能である（森下，1983）。各項目に対して、児童からみた母親の養育態度と照らし合わせて、「はい（2点）」、「わからない（1点）」、「いいえ（0点）」の3件法で評定を求めた。

## (2) 学校における社会的スキル尺度

児童の社会的スキルを測定するために、戸ヶ崎・坂野（1997）が作成した学校における社会的スキル尺度を用いた。この尺度は、友だちとの関係性に配慮する「関係維持行動」（8項目）、友だちとの関係を積極的に発展させる「関係向上行動」（7項目）、友だちと積極的にかかわろうとする「関係参加行動」（7項目）の3因子、合計22項目から構成されている。各項目に対して、自分の日ごろの行動と照らし合わせて、「いつもそうだ（4点）」、「ときどきそうだ（3点）」、「あまりそうでない（2点）」、「ぜんぜんそうでない（1点）」の4件法で評定を求めた。

## (3) 児童用共感性測定尺度

児童の共感性を測定するために、桜井（1986）が作成した児童用共感測定尺度（ESC）（20項目）のうち、天井効果が見られるなどの理由から7項目を削除した13項目を用いた。この尺度は小学生を対象に質問紙上で個人差としての共感性を測定し、向社会的行動との間に有意な正の相関が認められているものであり、本研究で用いるのに適切であると考えられた。各項目に対して、自分の行動や感じ方と照らし合わせて、「はい（5点）」、「どちらかといえばはい（4点）」、「どちらともいえない（3点）」、「どちらかといえばいいえ（2点）」、「いいえ（1点）」の5件法で評定を求めた。

## (4) 学級生活満足度尺度

児童の学級適応については、河村（1999）の学級生活満足度尺度を用いた。この尺度は、学級内で友だちなどから承認されているか否かと関連する「承認得点」（6項目）と、学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の有無と関連する「被侵害得点」（6項目）の2因子、合計12項目により、児童の学級への満足度を測定し理解するものである。各項目に対して、自分の学校での様子と照らし合わせて、「よくある（4点）」、「ときどきある（3点）」、「あまりない（2点）」、「まったくない（1点）」の4件法で評定を求めた。

手続き：調査は各学級担任に依頼し、学級ご

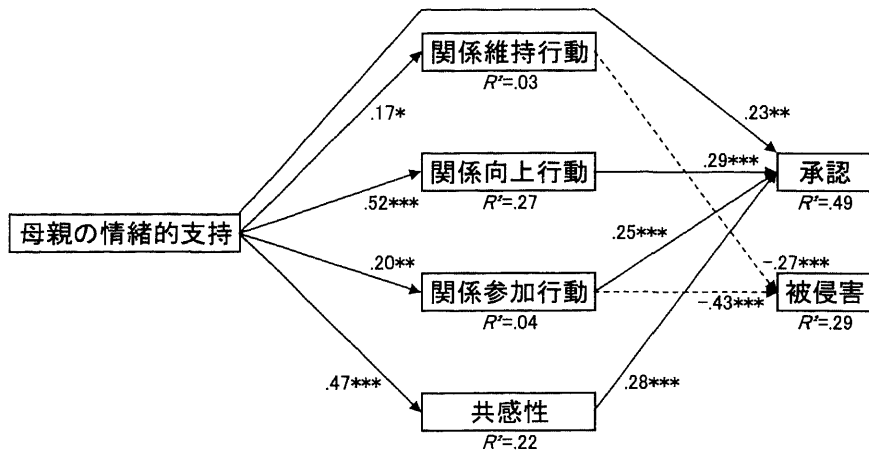
とに集団で実施した。上記の尺度を冊子にまとめ「日常生活調査票」とし、無記名式で回答を求めた。

## 結 果

### 1. 母親の情緒的支持が児童の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響を検討するパス解析

「母親の情緒的支持→児童の社会的スキル、共感性→児童の学級適応」というプロセスをパス解析により検討した。有意になったパスをFig. 1に示した。「母親の情緒的支持」からは、「関係維持行動」、「関係向上行動」、「関係参加行動」、「共感性」、「承認」へ正のパスが示された。パス係数は、「母親の情緒的支持」から「関係維持行動」で.17 ( $p < .05$ )、「母親の情緒的支持」から「関係向上行動」で.52 ( $p < .001$ )、「母親の情緒的支持」から「関係参加行動」で.20 ( $p < .01$ )、「母親の情緒的支持」から「共感性」で.47 ( $p < .001$ )、「母親の情緒的支持」から「承認」で.23 ( $p < .01$ )であった。児童の社会的スキル、共感性から児童の学級適応に対しては、「関係向上行動」、「関係参加行動」、「共感性」から「承認」へそれぞれ正のパスが示された。パス係数は、「関係向上行動」から「承認」で.29 ( $p < .001$ )、「関係参加行動」から「承認」で.25 ( $p < .001$ )、「共感性」から「承認」で.28 ( $p < .001$ )であった。また、「関係維持行動」、「関係参加行動」から「被侵害」へそれぞれ負のパスが示された。パス係数は、「関係維持行動」から「被侵害」で-.27 ( $p < .001$ )、「関係参加行動」から「被侵害」で-.43 ( $p < .001$ )であった。

以上は、「母親の情緒的支持が児童の社会的スキル、共感性を高め、さらに、その社会的スキルや共感性が児童の学級適応にポジティブな影響を与えるだろう」という本研究の仮説を支持する結果であった。母親の情緒的支持から高められた社会的スキル、共感性により、児童は学級内で承認されるが侵害されることが明らかになった。「母親の情緒的支持」からは「関



注) 数値はパス係数を示す。\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 。  
 実線は正のパス、破線は負のパスを示す。

Fig. 1 母親の情緒的支持が児童の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響を検討するパス解析の結果

係向上行動」と「共感性」へ特に強いパスが示された。さらに、母親の情緒的支持は、児童が学級内で承認されることに対して直接影響することも明らかになった。

## 2. 学級生活満足度4群別の検討

学級生活満足度尺度の承認得点、被害得点をもとに、河村(1999)の定めた得点基準に沿って、児童を学級生活満足群、非承認群、侵害行為認知群、学級生活不満足群の4群に分類した。その結果、学級生活満足群の児童は107名(61.9%)、非承認群の児童は16名(9.2%)、侵害行為認知群の児童は32名(18.5%)、学級生活不満足群の児童は18名(10.4%)であった。

群による各尺度得点の違いを検討するために、満足度を独立変数、各尺度得点を従属変数とする1要因の分散分析を行った(Table 1)。その結果、全ての尺度において、満足度の効果が有意であった(母親の情緒的支持: $F(3, 169) = 16.81, p < .01$ ; 関係維持行動: $F(3, 169) = 7.54, p < .01$ ; 関係向上行動: $F(3, 169) = 19.26, p < .01$ ; 関係参加行動: $F(3, 169) = 16.37, p < .01$ ; 共感性: $F(3, 169) = 17.64, p < .01$ )。さらに、Tukey法による多

重比較を行ったところ、「母親の情緒的支持」、「関係向上行動」、「共感性」においては、学級生活満足群>非承認群および学級生活不満足群、かつ侵害行為認知群>非承認群および学級生活不満足群であった。「関係維持行動」、「関係参加行動」においては、学級生活満足群>侵害行為認知群および学級生活不満足群であった。

## 考 察

### 1. 母親の情緒的支持が児童の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響について

パス解析の結果から、「母親の情緒的支持→児童の社会的スキル、共感性→児童の学級適応」というプロセスが実証され、仮説は支持された。

まず、愛情に満ちた受容的な母親の養育態度が、児童の社会的スキル獲得の程度を高めるとともに、共感性を望ましく発達させることが明らかになった。これまで述べてきたように、母親の行動が児童の社会的スキルや共感性に基づく思いやり行動のモデルとなっていると考えられる。この結果は同一視理論からも説明できるだろう。

同一視とは、他の人が持っているさまざまな特徴を、意識的無意識的に取り入れて内面化し、自己の特徴として自己を形成していくプロセスである。柏木（1966）は、親子間に類似性をもたらすメカニズムのひとつとして同一視を挙げている。親との関係がどのような場合に、子どもが親に同一視するかについては、防衛的同一視説、発達の同一視あるいは依存的同一視説、役割理論からの仮説、という3つの仮説が考えられている。このうち、依存的同一視理論では、親と関係にある母親や、受容的態度や自律性尊重を示す母親に対して子どもは同一視するのではないかと予想されている（森下、1982）。本研究において母親の情緒的支持得点が高いということは、児童が母親と自分の関係が情緒的に安定していると認知していることをあらわす。したがって、受容的で情緒的に安定した関係にある母親に対する同一視を通して、児童は、仲間関係を形成し円滑に維持していくための社会的スキルや共感性を身につけたものと考えられる。

「母親の情緒的支持」から「関係向上行動」、「共感性」へは特に強いパスが示された。「関係向上行動」は「こまっている友だちを助けてあげる」といった項目から構成されており、向社会性とも理解されるスキルである。これらの強いパスから、母親の受容的な態度は児童の情緒

面の発達により大きな影響を与えると推測される。

次に、社会的スキルおよび共感性が、児童が学級内で承認され侵害行為を受けないことに関係する、つまり学級適応を高めるということが明らかになった。学級内に自分の居場所をもち、価値を認められるためには関係向上行動、関係参加行動、共感性が重要であり、侵害行為を受けないためには関係維持行動、関係参加行動が重要であることが示された。戸ヶ崎・坂野（1997）は、学校における関係向上行動と関係参加行動を多く獲得している児童には人気児が多く、孤立児が少ないことを示している。ここで、社会的スキルの各行動の質的な違いに目を向けると、関係維持行動は現在築いている関係を維持する機能、関係向上行動は築いた関係をより深める機能、関係参加行動は仲間との関係を築く機能をそれぞれ持っていると思われる。

したがって、以下の2点が考えられる。ひとつは友だちと関わりを持つために必要な行動をとることができると、クラス内で自分の価値が認められる状態がもたらされる、ということである。もうひとつは、友だちとうまく関係を築き、そこで築かれた友だちとの関係を維持するように行動することで、クラス内でいじめや悪ふざけの対象となったり、他の児童とのトラブルをかかえたりしてしまう可能性が低減される、ということである。丹羽・山際（1991）が

Table 1 学級生活満足度4群別の、各尺度の平均値と分散分析結果

	①学級生活 満足群 (N = 107)	②非承認群 (N = 16)	③侵害行為 認知群 (N = 32)	④学級生活 不満足群 (N = 18)	F 値	多重比較
母親の情緒的支持	15.90 (2.88)	11.69 (2.36)	15.56 (3.11)	11.33 (5.20)	16.81**	①>②, ④** ③>②, ④**
関係維持行動	26.93 (3.34)	25.44 (4.31)	24.84 (3.86)	22.83 (5.34)	7.54**	①>③* ①>④**
関係向上行動	21.65 (2.50)	17.69 (2.39)	21.06 (2.84)	17.50 (3.92)	19.26**	①>②, ④** ③>②, ④**
関係参加行動	25.49 (2.96)	23.44 (2.31)	21.84 (4.62)	20.50 (5.01)	16.37**	①>③, ④**
共感性	51.04 (6.35)	40.69 (8.24)	50.06 (7.00)	41.72 (8.74)	17.64**	①>②, ④** ③>②, ④**

( ) 内は標準偏差。 \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

指摘するように、基本的な社会的スキル、あるいは適切にスキルが実行されないために学校で不適応状態に陥っていると思われる児童は決して少なくない。本研究の結果も、児童の学級適応に対する社会的スキル、スキルと同等の共感性の重要性を支持するものであるといえる。

そして、母親の情緒的支持が、児童が学級内で承認されることに直接影響を与えることが明らかになった。小学生を対象にした谷口・田中(2004)の研究および高校生を対象にした谷井・上地(1994)の研究において、親の養育態度が子どもの学校適応感に対して直接的な影響を与えることが示されている。Bowlby(1973)は、あらゆる対人関係での出来事を解釈し処理するのを手助けする、その個人特有の対人関係を判断する枠組みを仮定し、内的ワーキングモデルと呼んだ。そして、発達初期に形成されたモデルは、その後の成長過程でのあらゆる関係の情報処理に作用すると考えた。この内的ワーキングモデル理論によれば、家庭で母親から愛情を受け「自分は見守られている」と児童が感じることから、母親との安定したワーキングモデルが形成され、そのモデルがクラス内での友だちとの関係の解釈に作用する。「友だちは信頼できるし、自分はわかってもらえる」という友だちとの安定した関係は、その児童の母親との安定した内的ワーキングモデルによってもたらされたと考えられる。

しかしながら、戸ヶ崎・坂野(1997)は、母親の養育態度がクラス内での仲間からの社会的受容に対して直接的影響を持っていないことを見出している。児童の学級適応に対して母親の養育態度の及ぼす影響は、児童の社会的スキルや共感性によって完全に仲介されるのかどうか、あるいは、完全には仲介されないのならば、間接効果と比べその効果が小さい直接効果はどのように生じるのか、さらに検討する必要があると考えられる。

## 2. 学級生活満足度4群別の検討から得られる知見

満足度による各尺度得点の違いを検討したと

ころ、「母親の情緒的支持」、「関係向上行動」、「共感性」においては、学級生活満足群>非承認群および学級生活不満足群、かつ侵害行為認知群>非承認群および学級生活不満足群であった。学級生活満足群と非承認群、学級生活不満足群との違い、侵害行為認知群と非承認群、学級生活不満足群との違いは学級内で友だちなどから承認されているか否かである。したがって、母親の情緒的支持、3つの社会的スキル、共感性のうち、児童がクラス内で認められることに関して母親の情緒的支持、関係向上行動、共感性が重要な意味を持つことが示唆された。

また、「関係維持行動」、「関係参加行動」においては、学級生活満足群>侵害行為認知群および学級生活不満足群であった。学級生活満足群と侵害行為認知群、学級生活不満足群との違いは学級内における不適応感やいじめ・冷やかしの被害の有無である。よって、児童がクラス内で侵害行為を受けないことに関しては関係維持行動と関係参加行動が重要な意味を持つということが示唆された。

以上はパス解析の結果と類似したものである。児童の学級適応の2側面に及ぼす母親の情緒的支持、児童の社会的スキル、共感性の影響について、ある程度一貫した知見が得られたと考えられる。

## 3. 児童の学級適応を促すために

学級適応に関する予防的援助の方策のひとつとして、近年、社会的スキルからのアプローチが検討されている。藤枝・相川(2001)は、学級単位の社会的スキル訓練(Classwide Social Skills Training: CSST)を実施し、それが社会的スキルの程度の低い児童の社会的スキルの上昇に及ぼす効果を検証した。「社会的スキルの児童自己評定尺度」の結果からは、CSSTの有意味な効果は証明されなかった。この原因のひとつに、夏休み期間中の児童への働きかけの欠如が挙げられていた。社会的スキル訓練での般化については以前からその難しさが指摘されている(佐藤・佐藤・高山, 1993)。河村(2003)によれば、教師が社会的スキル訓練を実施する際に

は、授業時間などに特別な時間を設けるだけでなく、教育活動全般において、教示した社会的スキルを児童に意識させる必要がある。それにより行動が強化されるだけでなく、社会的スキルが特別な場面での行動ではなく、日常生活全般で活用されるものであることを認識させることができ、般化も図られるという。

本研究では、母親の情緒的支持と学校における社会的スキルの関連が明らかになった。家庭は児童の生活の基盤である。その家庭を社会的スキルの必要性を再認識し、般化させていく場とするならば、児童の社会的スキル獲得に際して、母親は愛情に満ちた受容的な態度で児童に接することが求められると考えられる。家庭における母親の優しく温かい態度がモデルとなり児童の社会的スキル獲得の程度を高めるからである。児童だけでなく母親も含めたプログラムを導入することで、社会的スキル訓練のより大きな効果をもたらされると予想される。

首藤(1994)によれば、家庭は共感性の学習の場であり、家庭は児童期の思いやり行動の発達の中心的な担い手となっている。本研究の結果からも、母親の情緒的支持が児童の共感性を望ましく発達させることが明らかになった。家庭における母親との情緒的に安定した関係は児童の他者への思いやりの発端であるといえる。

児童の学級適応に関して、教師からの援助をより効果的にするために、母親の協力は必要不可欠だろう。児童の学級適応を促すために、あるいは学級不適応に陥ってしまった場合早期に問題を解決するために、児童に対する母親の温かい働きかけが求められる。一緒にいるだけで気持ちが落ち着くような愛情深い母親の態度によって、児童は良好な友だち関係を維持し、学級生活を安心して意欲的に送ることができるのである。

#### 4. 本研究の問題点と今後の課題

本研究の問題点としては以下の2点が挙げられる。

第1に、本研究の仮説は、児童の学級適応に及ぼす母親の養育態度の影響が、児童の社会的

スキルや共感性によって完全に仲介されると想定するものである。しかし、「母親の情緒的支持」から「承認」へ直接有意なパスが示され、間接効果と比べその効果は小さいながらも直接効果が見られた。この直接効果を内的ワーキングモデル理論から説明することを試みたが、どのようなプロセスを通して生じているのかについて、今後さらなる検討が必要であると思われる。

第2に、本研究で扱った尺度の測定は全て児童の自己評定に頼っている。このことが、母親の情緒的支持、社会的スキル、共感性、学級適応の間の相関を高めている可能性があり、本研究で得られた結果は当然であるともいえる。類似の研究(谷口・田中, 2004; 戸ヶ崎・坂野, 1997)においても指摘されているように、養育態度については母親自身による評定、社会的スキルおよび共感性については教師、友だちによる評定や行動観察によって測定されたデータなどを取り入れることが望ましい。それらと本研究で得られた結果の関連を検討することによって、本研究で想定した「母親の情緒的支持→児童の社会的スキル、共感性→児童の学級適応」というモデルの妥当性について検討を行う必要があるだろう。

#### 引用文献

- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: vol. 2 Separation*, The Hogarth Press. (ボウルビー, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子(訳) 1977 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 *教育心理学研究*, **49**, 371-381.
- Gresham, F.M. 1986 Conceptual and definitional issues in the assessment of children's social skills: Implications for classification and training. *Journal of Clinical Child Psychology*, **15**, 3-15.
- 春木豊・岩下豊彦(編著) 1975 共感の心理学 川島書店

- 井上健治 1992 人との関係の広がり 木下芳子(編) 新・児童心理学講座8:対人関係と社会性の発達 金子書房 1-28.
- 井上恭子 1995 児童後期における社会的スキルと母親の養育態度との関連 臨床教育心理学研究, 21, 137-146.
- 石川芳子・小林正幸 1998 小学校における社会的スキル訓練の適用について:小集団による適用効果の検討 カウンセリング研究, 31, 300-309.
- 柏木恵子 1966 同一視に関する最近の研究 教育心理学研究, 14, 230-245.
- 河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケート 図書文化社
- 河村茂雄 2003 学級適応とソーシャル・スキルとの関係の検討 カウンセリング研究, 36, 121-128.
- 菊池章夫 1998 また思いやりを科学する:向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 三隅二不二・阿久根求 1971 両親の指導性が児童の学業成績, テスト不安と適応性に及ぼす効果 教育・社会心理学研究, 10, 157-168.
- 文部科学省 2005 生徒指導上の諸問題の現状について(概要)
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30, 142-146.
- 森下正康 1983 児童期の親子関係と対人行動特性の同一視 和歌山大学教育学部教育研究所報, 6, 27-39.
- 森下正康 1988 児童期の母子関係とパーソナリティの発達 心理学評論, 31, 60-75.
- 丹羽洋子・山際勇一郎 1991 児童・生徒における学校ストレスの査定 筑波大学心理学研究, 13, 209-218.
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, 34, 342-346.
- 佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1988 拒否される子どもの社会的スキル 行動療法研究, 13, 26-33.
- 佐藤容子・佐藤正二・高山巖 1993 攻撃的な幼児に対する社会的スキル訓練:コーチング法の使用と訓練の般化性 行動療法研究, 19, 13-27.
- 首藤敏元 1994 思いやり行動の発達心理 児童心理, 48, 16-22.
- Sullivan, H.S. 1953 The interpersonal theory of psychiatry. New York: Norton. (サリヴァン, H. S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鏑幹八郎(訳) 1990 精神医学は人間関係論である みすず書房)
- 鈴木聡志・庄司一子 1990 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, 28, 24-32.
- 谷口弘一・田中宏二 2004 親の養育態度が児童・生徒の社会的スキル, 学校適応感, および絶望感に及ぼす効果 岡山大学教育学部研究集録, 127, 21-27.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響:積極的拒否型の養育態度の観点から 教育心理学研究, 45, 173-182.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976 親子関係診断尺度EICAの作成:因子的真実性の原理による項目分析 関西大学社会学部紀要, 7, 1-14.
- 渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 38, 151-156.